

Title	しまくとぅば普及推進活動団体「くとうば・すりーじゃにぬふあぶし」活動報告とまとめ
Author(s)	崎原, 正志; 親川, 志奈子
Citation	沖縄工業高等専門学校紀要 = Bulletin of National Institute of Technology, Okinawa College(15): 9-21
Issue Date	2021-03-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12001/24827">http://hdl.handle.net/20.500.12001/24827</a>
Rights	沖縄工業高等専門学校

# しまくとうば普及推進活動団体 「くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶし」 活動報告とまとめ

\*崎原 正志<sup>1</sup>, 親川 志奈子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>総合科学科 (masashisakihara@gmail.com) ,

<sup>2</sup>一般社団法人マッターラ ハゲラキッズクラブ (那覇市放課後児童クラブ)

## 要旨

本稿では、2012年から2015年に沖縄本島中南部を中心に活動していた「くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶし」の活動内容等について報告を行い、活動の総括を行う。第1章では、当該団体の概要および設立経緯について説明し、第2章で、実際の活動について詳細に記述する。第3章で会計報告を行い、最後の第4章では、本活動を通じての今後のしまくとうば普及推進運動への展望および提言を行う。本稿が今後のしまくとうば普及推進運動に有益な情報となれば幸甚である。

キーワード：しまくとうば、うちなーぐち、児童教育、言語再活性化 (language reclamation)

## 1. 概要および設立経緯

「くとうば・すりーじゃ☆にぬふあぶし」(以下、「にぬふあぶし」)は、ハワイ留学時代にハワイ語再活性化運動<sup>1)</sup>について学び刺激を受け、沖縄に帰ってきた有志たちが2012年に結成・設立した、未就学児＝幼稚園児以下の児童(以下、児童)を対象とした沖縄語＝うちなーぐち(以下、うちなーぐち)を学ぶ場を提供するボランティア団体である。「くとうば」は「言葉」、「すりーじゃ」は「学び舎」を意味し、ここで言う「くとうば(言葉)」とは沖縄中南部地方で話される「うちなーぐち」を指す。「にぬふあぶし(北極星)」は沖縄童謡の「ていんさぐぬ花」の歌詞に由来する。

ゆる はらす ふにや にぬふあぶし みあてい

(夜に走らせる船は、北極星を目標にして)

わん なちえーる うやや わんどう みあてい

(私を産んでくれた親は、私を目標にして)

この歌が表すように、しまくとぅば普及推進運動<sup>2)</sup>において、うちなーぐちを学ぼうとする児童にとって、夜空に光る「にぬふあぶし（北極星）」のような存在になれる団体を目指して設立から2015年までの約3年間、精力的に活動を行なった。

崎原正志と親川志奈子が共同代表兼講師となり、manaleo<sup>3)</sup>（マナレオ）役に「宜野湾市うちなーぐち会」の與儀清子氏、佐渡山幸子氏、伊波米子氏を招聘し、多くの貴重な知恵をお貸しいただいた。また、しまんちゅスクール（当時、宜野湾市嘉数在）の貸スペースを活動場所とし、事務局を琉球大学の石原昌英教授が引き受けてくださった。

## 2. 活動内容

「にぬふあぶし」では、2つのクラスを設けており、1つは0～2歳児を対象とした「えんちゅ（ねずみ）組」クラス、もう1つは3歳以上を対象とした「まやー（ねこ）組」クラスである。次に各クラスの具体的な活動内容について述べる。

### 2.1 0～2歳児クラス（えんちゅ組）

講師（かじとぅい <sup>4)</sup> ）	親川志奈子
主な活動	TPR（挨拶、伝統遊び、ボール遊び、お絵かき）、童歌・手遊び・踊り、遠足

#### 2.1.1 TPR（トータルフィジカルリスポンス）

このクラスは言葉を話し始める前の乳児から大人の真似をして発話できる2歳くらいまでの子どもたちを対象にしたもので保護者も一緒に参加した。幼児英語教育などの小さな子ども向けの語学学習の機会に用いられることの多い教授法 Total Physical Response (TPR)を採用し、指導者のうちなーぐちによる指示に動作や言葉で反応してもらうと言う手法を積極的に取り入れた。「はじみやびら（始めます）」と言って頭を下げ挨拶をする、「あり むっちくーわ（あれ持ってきて）」と言われてボールを取りに行く、絵を描いて「うれー まーさる ばさない やさやー（これは美味しいバナナだね）」「まーさんまーさん（美味しい美味しい）」と言いながらバナナを食べる真似をするなど、うちなーぐちによる声かけに合わせて親子でアクションを取っていくことで、母語を獲得するようにうちなーぐちに触れられるようプログラムを組み立てていった。

Manaleo 役の先生方には、赤ちゃんを寝かしたおくるみを手前に引き寄せながらする「むするびーち」という遊びや、夜帰る時に「あんまーくーとー」といっておでこに唾をつけるおまじない、転んだりして痛い思いをした時は「ていーぬわたくすい」と言い手当する方法など、沖縄で昔から子どもを育てる時に使われる声かけやおまじないなどを教えていただいた。「昔おばーちゃんが言っていたの

を思い出した、次から使ってみよう」と話す保護者もいて、世代間でうちなーぐちが受け継がれていることやうちなーぐちを話せない世代も子育てを通して子どもの頃うちなーぐちに触れていたことを思い出す良い機会となった。

### 2.1.2 わらび歌（童歌）、踊り

わらび歌や手遊び・踊りもまた、うちなーぐちの世界に浸り、そのリズムを楽しみ、覚えて口に出すための良い活動となった。保護者には歌詞カードを配り、毎回何曲かの歌を歌いながら手遊びをしたり、振り付けをつけて踊ったりした。主なわらび歌・手遊び・踊りは以下の通りである。

表1 歌一覧（えんちゅ組）

種類	曲名
わらび歌・手遊び・踊り	ていんさぐぬ 花（ハウセンカの花）
	はぶで一びる（ハブですよ）
	いいー そーぐわちやー（良い正月だね）
	あかたすんどらんち（赤田首里殿内）
	ちぶる かた ちんしー ぽん（頭肩膝ぽん）
	花ぬ かじまやー（花のかざぐるま）
	ちんくわーん 豆腐ん まーさん（かぼちゃも豆腐も美味しい）
	唐船どーい（唐船だぞ）

### 2.1.3 うちなーすごろく

当時筆者（親川）がえんちゅクラスの様子や、子育ての中のうちなーぐちをテーマに沖縄タイムスのほーむプラザにコラムを連載<sup>5</sup>していたことをきっかけに、年の新年号にうちなーすごろくを掲載することになった。えんちゅクラスの子もたちや親たちが中心となりすごろくを作成し、一緒に遊びながらゴールを目指すと言う企画となった。子どもたちとうちなーぐちを学びながらメディアを巻き込むことができたことは消滅の危機に直面している言語を復興させるための活動を行っていた成果の一つと言えるだろう。

## 2.2 3歳以上クラス（まやー組）

講師（かじとうい）	崎原正志
日時	毎週水曜日 19時～20時
主な活動	挨拶、歌、手遊び、踊り

このクラスは、3歳以上の未就学児を始めとし、小学校高学年生までの児童が保護者同伴で参加した。多くは、2011年に北中城村あやかりの杜で行われた宜野湾市うちなあぐち会によるしまくとうば養成講座を基に教材作り・授業内容の組み立てを行なった。

### 2.2.1 挨拶

挨拶は、非常に重要な役割を担っていた。授業の始まりでは、活発な児童らが多いなか、きちんと正座させ、「くりから うちなあぐちぬ クラス はじみやびら（これから沖縄語のクラスを始めます）」「うー、うにげーさびら（はい、お願いします）」と言って挨拶をしてからクラスを始めた。

終盤に差しかかると児童らは活動を通して興奮状態にあるので、もう一度落ち着かせるために、再び座らせた。あるいは輪を描いて手を繋ぎ、「くりっし うちなあぐちぬ クラス うわやびら（これで沖縄語のクラスを終わります）」「にふえーでーびる（ありがとうございます）」と言って終わりの挨拶をし、クラスを終えるようにした。

### 2.2.2 歌

挨拶の次に「くとうばわしりーねー（言葉を忘れると）」という歌を歌った。「くとうば わしりーねー、くに わしゆん。くに わしりーねー、うや わしゆん（言葉を忘れると、故郷を忘れる。故郷を忘れると、親先祖を忘れる）」という諺を「ていんさぐぬ花」のメロディーに乗せて歌う創作歌である。このクラスの目的・意義を歌という形で始めに示しておくのがねらいである。

また、その他にも様々な歌を通してうちなあぐちを学んだ。多くは、宜野湾市うちなあぐち会（2011）から引用した。最初の集まりでは簡単な歌を歌い、集まりの最後にいくつか録音しておいたCDと歌詞をプレゼントして、家でも聴いてもらった。クラスではそのCDに収録された曲から選んで歌を練習した。曲目は次の通りである。

表2 歌一覧（まや一組）

種類	曲名	備考
童謡	ていんさぐぬ 花（ハウセンカの花）	※簡単な振り付けあり
	あっちゃー そーぐわちどー（明日は正月だぞ）	
	いいー そーぐわちやー（良い正月だね）	
	あかたすんどうんち（赤田首里殿内）	
民謡	ひやみかち節	
	テンヨー節	
創作	くとうば わしりーねー（言葉を忘れると）	

### 2.2.3 手遊び

「手遊び」と言っても手だけでなく体全体を使いながら、歌を歌い遊びながら学んだ。歌によってはお手玉のような小道具を使うものや、二人一組になってペアで行うものもあった。こちらも多くは、宜野湾市うちなあぐち会（2011）から引用した。

表3 手遊び一覧（まや一組）

種類	曲名	備考
童謡	いったー すーや んー なーが（お前の父ちゃんは名前何か？）	数え歌。い(1)ったー(2)のように歌詞が数字になっている。
	とうつくいぐわー（小さい徳利）	輪になってお手玉を左で受けて右に手渡ししながら歌う。
	いっちくたっちく	沖縄版「ずいずいずっころばし」。手で輪を作って遊ぶ。
	やんばーらーが いっちょーんどー（やんばる船が来たぞー）	二人一組で床に足を伸ばした状態で座り手を取りシーソーのような動きをして歌いながら遊ぶ。
創作	ちぶる かた ちんし ぼん（頭、肩、膝、ぼん）	沖縄版「頭、肩、膝、ぼん」。体の部位を指しながら歌う。
	1と1で いちゃりば ちよーでー（1と1でみんな兄弟）	数え歌。
	ちんくわーん とーふん まーさん（かぼちゃも豆腐もおいしい）	野菜や食べ物の名前を学習させるために使う。「ちんくわー（かぼちゃ）」や「とーふ（豆腐）」の部分を別の単語に置き換えて歌うことができる。
	はぶでーびる（ハブでございます）	手をハブの形にして動かし、歌いながら遊ぶ。

### 2.2.4 踊り

琉球舞踊や空手の型をモチーフにした簡素化された踊りを用いて、身体全体を動かし、うちなあぐちの歌詞や独特のリズムに親しむ機会を提供した。動きは手遊びより難易度が高いため、活動に慣れてきた年長の児童を対象に実施するとよい。

表4 踊り一覧 (まや一組)

種類	曲名	備考
童謡	ていんさぐぬ花	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=VNtnzbkXIz0">https://www.youtube.com/watch?v=VNtnzbkXIz0</a>
歌謡 曲	童神 (わらびがみ)	佐渡山幸子氏が座りながらも踊れる振り付けを創作。老人養護施設等でも活用可能。

## 2.2.5 その他

### 2.2.5.1 紙芝居

『ペネロペ いろであそぶ』(グットマン・ハレンスレーベン 2006) をうちなーぐちに訳し、紙芝居を作成、児童に読み聞かせたり、逆に児童らに読んでもらったりした。うちなーぐちを身近に感じてもらうために、馴染みのキャラクターが登場するものや話の内容をよく知っている絵本を選んで翻訳・作成するとよい。

### 2.2.5.2 ソテツ葉工作

2014年7月23日、ソテツの葉を用いてカゴや手裏剣等の工作を行った。ソテツの葉で工作を行うには、葉が若いうちでなくてはならず、工作する時期と葉を積む場所が大事だということを学んだ。活動後の facebook ページには次のように記されている。

すーていーちゃーぬ はーさーに 虫かごぐわーちゅくたんどー。はっさ、よねこしんしーや  
 あんし じょーじやみせーる！わーむのー いっぺー やなかーぎーぐわーやさ… わんが 大  
 学から とうていちゃる くぬ すーていーちゃーぬ はーや どうく さくさぬ しぐ うり  
 ーたん… すーていーちゃーぬ はーさーに むぬ ちゅくんでいしーねー はーぬ わかさる  
 時分に しわるやんでいさ！！

(ソテツの葉で虫かごを作ったよ。米子先生はなんて上手なんだ！私の物は全然上手じゃない。私が大学から取って来たソテツの葉はとても脆くてすぐ折れる。ソテツの葉で工作するなら、葉が若いうちにしないといけないそうだ！)

## 2.3 合同活動

### 2.3.1 しーすびー

2012年12月22日 活動の終わりの節目には、まや一組と合同で、児童らが活動を通して学んだことを発表し、総括を行うことを目的として、「しーすびー」と称した発表会を実施した。「しーすびー」とは「小人数での共同作業、工事、大工仕事などが終わったあとの仲間同士の打ち上げ会」のことを指す(儀間 2011)。

表5 しーすびープログラム

順番	題目	備考
1	はじまいぬ えーさち (始まりの挨拶)	
2	くとうば わしりーねー (言葉を忘れると)	
3	どーしらし (自己紹介)	一人一人、名前と出身地等簡単な自己紹介をうちなーぐちで行う。
4	ちんくわーん とーふん まーさん (かぼちやも豆腐もおいしいね)	
5	ちぶる かた ちんし ぽん (頭、肩、膝、ぽん)	
6	うしぬ ぱん それぞれ (牛の足それぞれ)	
7	いっちくたっちく	
8	ひーさっさー、まーさっさー (寒いなー、おいしいなー)	身振りを交えながら、形容詞の表現を披露する。
9	はぶでーびる (ハブでございます)	
10	あかたすんどらんち (赤田首里殿内)	
11	かちやーしー	かちやーしーの曲に合わせて即興で踊る。
12	うわいぬ えーさち (終わりの挨拶)	
13	くわっちータイム (ご馳走の時間)	持ち寄ったご馳走をみんなでいただく。
14	スライドショー	活動のハイライトをスライドショーで見せる。
15	すりー (会合)	児童と保護者に分かれて行う。児童には読み聞かせ等、親は座談会。

### 2.3.2 春の遠足 (農場見学)

2013年3月23日、与那嶺義雄氏の農地にて遠足(農場見学)を実施した。元幼稚園教員の玉那覇香代子氏から昔の子どもたちの遊びや家庭での役割について次のような説明があった。例えば、昔の子どもたちは年下の弟妹の面倒を見ながら親たちと一緒に畑に行き、お手伝いをしたり豚や鶏に餌をやったりした。遊びの中でうちなー(沖縄)の歌を習い、食べられる木の実を見つけて食べたり、草を使っておもちゃ作りをした。話を聞いた後、参加者はわらびうた(童歌)と一緒に歌い、うちなーぐちの野菜の名前を学んだ。それから畑に出て、人参やキャベツを見ながら「ちでーくに、たまなー」



と学んだ知識で野菜の名前を口に出してみたり、「たまなー むっちくーわ(キャベツとってきて)」などの指示に従い収穫体験を行った。また、収穫した野菜をサラダにして食べるという体験もできた。

### 2.3.3 ホームページ等

インターネット上のホームページ等は下記の通りである。

facebook ページ : <https://www.facebook.com/pages/Okinawan-Language-Immersion-School-Ninufabushi/493013197412858>

ホームページ : <https://sites.google.com/a/okinawanstudies107.org/ninufabushi/home>

## 3. 会計報告

活動を終了するにあたり、活動初年度から今年度までの決算報告をまとめて行う。収入は主に会費と寄付である。会費は、活動日に参加者から 500 円の会費を資料代として徴収したものである。寄付に関しては、「御冠船歌舞団」を通してハワイの方々から多くの寄付をいただいた。また、国内では県内外から活動に興味を持ってくださった多くの方々から寄付をいただいた。収入は教材費・物品費・会場費・人件費・謝金に充てた。

余った収入は、うちなーぐちの指導をしてくれた「宜野湾市うちなあぐち会」と「にぬふあぶし」の活動を引き継いでくれる「ハゲーラキッズクラブ（那覇市放課後児童クラブ）」に寄付することで承認された。以下の通り、会計報告を行う。

### 3.1 決算報告

会計年度 2012年4月～2020年12月

### 3.2 収入

会費等	145,792
寄付 +	<u>56,317</u>
	202,109

### 3.3 支出

寄付（宜野湾市うちなあぐち会）	100,500
寄付（学童）	<u>101,609</u>

0

（単位 円）

#### 4. 今後の展望および提言

ここでは、未就学児を対象としたしまくとうば教育への今後の展望および提言を述べる。始めに2つの文献を用いながら未就学児を対象としたしまくとうば教育への人々の興味・関心・意識について考察し、次にその考察と「にぬふあぶし」の活動を通しての経験から今後の展望および提言を述べる。

##### 4.1 児童（主に未就学児）を対象としたしまくとうば教育

果たして、児童を対象としたしまくとうば教育への人々の関心はどの程度であろうか。ここでは、沖縄県学童保育連絡協議会（2012）および石原昌英（2013）を用いて、しまくとうば教育への興味・関心・意識に関する項目だけに焦点をあてて考察する。

沖縄県学童保育連絡協議会（2012）では「県内の学童クラブを無作為に抽出」し、そこに通う児童・保護者・指導員を対象に、平成24年にアンケート調査を実施している<sup>6</sup>（p.2）。実施地域は、国頭語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語が話されている地域で、年齢は4歳～12歳にまたがっている。

当アンケートで最も注目すべき点は、児童と大人（保護者および指導員）との間に意識的なギャップが見られることである。そのギャップは、特に沖縄語が話されている地域に顕著である（太字・下線部分は崎原が追加）。

表6 児童調査における児童のしまくとうばへの興味・関心・意識

<p>⑦あなたはしまくとうば（方言）を話せるようになりたいと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・全体の43.9%の児童がしまくとうば（方言）を話せるようになりたいと思っているが、30.6%は思わないという結果になった。<u>なかでも、沖縄は話せるようになりたいと思っている（37.5%）が、思わない（39.3%）児童を下回った。</u>（p.8）</li></ul>
<p>⑧学童でしまくとうば（方言）をつかってお話ししたいですか。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・学童でしまくとうば（方言）を使って話したくないと感じている児童が、全体の52.9%と半数を超えており、<u>なかでも沖縄は69.0%と子どもたちのしまくとうば離れが顕著に表れている。</u>（p.8）</li></ul>

表7 保護者調査におけるしまくとうば教育への興味・関心・意識

<p>⑤あなたの子どもがしまくとうば（方言）を使うことをどう思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・（前略）全体の78.0%は賛成としており、なかでも与那国は100%が賛成という結</li></ul>
--

果となった。(p. 12)

⑦学童保育にしまくとぅば(方言)を取り入れることについてどう思いますか。

- ・(前略)全体の83.3%は賛成とし、地域別に見ても、国頭で88.1%、宮古で74.4%、八重山で71.0%、与那国で80.0%と高くなっている。(p. 13)

⑧しまくとぅば(方言)の継承は必要だと思いますか。

- ・(前略)全体の87.4%の保護者が必要と思っており、地域別に見ても、沖縄の93.0%を筆頭に多くの保護者が必要だと感じている。(p.15)

表8 指導者調査におけるしまくとぅば教育への興味・関心・意識

⑥学童保育に積極的にしまくとぅば(方言)を取り入れることをどう思いますか。

- ・反対の意見はなく、全体の77.3%と賛成の割合が高くなっている<sup>7)</sup>。(p. 20)

⑧しまくとぅば(方言)の継承は必要だと思いますか。

- ・全体の84.1%の指導員が継承の必要性を感じているという結果となった。地域別に見ても、八重山では100%、沖縄では92.9%と高い割合になった。(p.21)

石原昌英(2013)では、宮古島市の保育園と那覇市の幼稚園にアンケート調査を実施している(p. 79)。ただし、児童に直接問うアンケートは実施していない点で先述のアンケートと異なる。宮古島市の保育園による具体的な人々の興味・関心・意識についての記述はない(現在の活動内容に関する記述がほとんど)。那覇市の幼稚園については、数値化はされていないが、『わすれやすい、意味を理解させにくい』という反応を除いては、ほとんどの幼稚園の取組について幼稚園児及び保護者は好意的な反応を示しているが、『アンケート回答では記述されていないが、幼稚園児が方言を使うことによって、保護者だけでなく祖父母も喜んでいるであろうことが推測される』(p. 84)という記述がある。

このような記述や先の学童のアンケートから考察されることは、大人側の興味・関心・意識を優先してしまくとぅばを取り入れた活動を実施している現状があるかもしれない。

#### 4.2 今後の展望および提言

先述の考察では、児童と大人との間にしまくとぅば教育に対する意識的なギャップが存在する可能性があることを述べた。したがって、今後、そのギャップをどのように埋めながら児童へのしまくとぅば教育を進められるかが重要である。このことを踏まえながら、さらに自身の活動を通して学んだ経験から次のような提言を行う。

表9 今後の展望・提言

- ・**児童教育としまくとぅば教育に関する研究が必要**。なぜしまくとぅばを学ぶのかを意識付け、児童と大人との間の意識的なギャップを埋めるために、児童側のしまくとぅば（教育）への興味・関心・意識について調査する必要がある。
- ・**誰もが利用可能な質の高い教材が必要**。しまくとぅばを第一言語とする話者数が減少し、第一言語話者の指導やサポートを得られない状況を考えなければならない。文字だけでなく、音声付きの教材が必須である。崎原（2020）によると、実際に使用されている発音と文字資料の記述とで違いが見られる場合がある<sup>8</sup>。実際の音声資料があれば、記述との違いがあっても、実際の発音を確認することが可能である。
- ・**オンラインでどこからでもアクセスできる教材や活動環境が必要**。感染症対策というより、新型コロナウイルスが拡散する以前から、参加者確保が困難であった経験から、自宅や職場からも参加できたり、自主学習ができたりするとよい。
- ・**それぞれの地域にあった教材や人材が必要**。しまくとぅばが地域によって違うということのみならず、海外でのしまくとぅば教育の需要も高まっている。したがって、各地域のしまくとぅばを教える教材に加え、英語やスペイン語等、海外の県系人の多くが使用する言語で書かれた教材も必要である。

## おわりに

「にぬふあぶし」は本報告を以って活動終了とするが、今後、児童らへのしまくとぅば普及を推進していけるよう、今までの活動を新しい形で引き継いで活動を再始動させていくことも可能である。

## 謝辞

ハワイ・御冠船歌舞団とその支援者の方々や国内外の多くの方々から寄付金をいただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

活動場所を提供してくださった Ryukyu 企画の照屋みどり様には、活動当初から多大なご支援を受け賜りました。深く感謝申し上げます。

宜野湾うちなあぐち会の與儀清子様、佐渡山幸子様、伊波米子様には現場で直接うちなあぐちに関するご指導をいただきました。残念ながら佐渡山幸子先生は活動休止中に亡くなりましたが、うちなあぐちのみならず児童教育に関する貴重なアドバイスを多数いただき、佐渡山先生なしには活動は不可能でした（崎原 2019 を参照）。心より感謝の意を申し上げます。

その他、ここには書けない程の多くの方々のご助力とご支援を受けて、約3年間活動を続けることができ、現在の私たちの活動に確実に繋げることができています。慎んで感謝申し上げます。

## 引用／参考文献

- アン・グットマン(文)、ゲオルグ・ハレンスレーベン(絵) (2006)『ペネロペ いろであそぶ』岩崎書店.
- 石原昌英 (2013)「保育園・幼稚園における取組」『文化庁委託事業報告書：危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』琉球大学国際沖縄研究所.
- 沖縄県学童保育連絡協議会 (2012)「「しまくとぅば（方言）についての調査」結果報告書」（第21回沖縄県学童保育研究大会配布資料）.
- 沖縄言語研究センター言語地理学定例研究会 (1983)『琉球列島の言語の研究：全集落調査票』
- 宜野湾市うちなあぐち会 (2011)「第3回講義 おきなわのわらべ歌」（あやかりの杜しまくとぅば養成講座配布資料）.
- 儀間進 (2011)「語てい遊ばなシマクトゥバ：シーすびー」沖縄タイムス 21面、2011年12月11日掲載.
- 崎原正志 (2019)「《追悼エッセイ》佐渡山幸子しんしー」『月刊琉球』12・1月合併号、pp.84～86、株式会社 Ryukyu 企画.
- 崎原正志 (2020)「本部町具志堅地区におけるしまくとぅばの基礎語彙調査」（未発表）.
- むとうぶくとぅば単語帳編集委員会 (2020)「ぐしちん（具志堅）くとぅばたんごちょう」沖縄県しまくとぅば普及センター.
- Hawai‘iniuika: School of Hawaiian Knowledge. *Nā Papahana Mānaleo*. Sept. 7, 2020 Accessed. Retrieved from <https://manoa.hawaii.edu/hshk/kawaihuelani/hana/na-papahana-manaleo/>.
- NeSmith, R. Keao. (2005). Tūtū’s Hawaiian and the Emergence of a Neo Hawaiian Language. ‘*Ōiwi Journal*3—A *Native Hawaiian Journal*. Kuleana ‘Ōiwi Press.

---

<sup>1</sup> ハワイ語再活性化運動は、1970年代に興ったハワイアン・ルネッサンス（ハワイ文化復興運動）の流れを受けて、ハワイ固有の言語への誇りを取り戻すとともに、ハワイ語の再活性化を实践する運動のことである。1700年代には200,000～800,000人のハワイ語を第一言語とする話者がいたが、1970年代には1,000人ほどに落ち込み、現在は復興運動が功を奏しハワイ語を第二言語とする話者と第二言語話者から継承された新しい形のハワイ語（ネオハワイ語）の話者人口が増加している（NeSmith 2005）。

<sup>2</sup> しまくとぅば普及推進運動は、2009年のユネスコによる「しまくとぅば（琉球列島の諸言語・諸地域言語の変種の総称）」の危機言語の認定を受けて、しまくとぅばの再活性化を目指す公的機関あるい

---

は民間による一連の運動のことである。

<sup>3</sup> manaleo とはハワイ語で第一言語話者（ネイティブスピーカー）のことを指す。ハワイ大学マノア校では、学生が manaleo に気軽にアクセスできるようなプログラムがいくつも展開されている（Hawai'i nuiākea: School of Hawaiian Knowledge 参照）。「にぬふあぶし」でも活動中は必ず第一言語話者を指導・相談役として配置し、第一言語話者が話すうちなーぐちに児童らが触れられるように配慮した。

<sup>4</sup> うちなーぐちで「舵取り」を意味する。かじとういは、クラスの舵取り、つまりファシリテーターとなり、講師・運営役を担う。

<sup>5</sup> コラム連載は、沖縄タイムス住宅新聞社発行の別冊週刊誌『週刊ほ〜むぷらざ』にて、2012年7月から2016年3月までの3年8ヶ月間掲載された。

<sup>6</sup> 保護者および指導員には直接記入してもらい、児童には指導員が読み上げて児童が答えた内容を指導員が記入した（p. 2）。

<sup>7</sup> 残りの22.7%は「わからない」と回答。「反対」と答えた人はいなかった。

<sup>8</sup> むとうぶくとうば単語帳編集委員会（編）（2020）に記載の編集者を含めた具志堅方言の話者3人に対して、崎原が2019年に数回、具志堅方言の基礎語彙について面接調査を実施した。調査方法は、該当する日本語を提示し、しまくとうばに直してもらうごく一般的な方法を用いた（例：「あたま（頭）」→「チンプ」等）。調査票は、沖縄言語研究センター言語地理学定例研究会（1983）を用いた。約130項目のうち、むとうぶくとうば単語帳編集委員会（編）（2020）の記述と崎原の面接調査との違いが見られた項目は、約40項目に上った（例：「祖父」たんめー（むとうぶくとうば単語帳編集委員会、以下、む単）vs ぷっすー（面接調査、以下、調査）、「袋」ふくーる（む単）vs ぷっく（調査）、「土」みーちゃ（む単）vs みちゃー（調査）等）。